



難しいプラスチック金型設計・製造に挑戦80年

～金型のなんでも屋に徹して技術力アップ～

松田金型工業株式会社 会長 松田 正雄氏

昭和10年ベークライト金型で起業

1990年バブル崩壊後の経済はダッチロール化しデフレの一途を辿った。社員は一人減り二人減り増員をせぬまま現在に至った姿は、金型業界の統計分布から見ると一番集中しているレンジかもしれない。しかし、結果的に残ってくれた社員は、社歴25年以上の熟練工が現場を支えCAD担当社員も15年前後の経験者で贅肉のないスタッフ集団と言える。

松田会長の父は昭和10年にベークライトの金型業「松田製作所」を立ち上げた。それまでは猟銃製造の企業で丁稚奉公をし、精密機械の技術者として修業を積んでいた。しかし、お客さんに出来あがった猟銃の“試し射ち”に連れられて、沢山の動物たちが自分の製作した銃で撃たれ、体をぶるぶる震わせている姿を見ていることに耐えられなかったという。また、自分自身もかつて火薬工場を経営していた両親が工場爆発により、そこで働いていて犠牲になり、小さい時に一人残された。縁あって父の知人がやっていた猟銃製造工場に丁稚奉公をせざるを得ないという不幸な過去も重なり、途中でそこを辞めた。

独立した父は、猟銃を作っていた加工技術の腕を生かして印鑑用の朱肉入れや学童向けの硯など

の金型の受注から始めた。その当時の成形材料にはレコード盤と同じような練り物が使われた。その後、ベークライトを成形材料とした真空管の足や電球のソケットの金型に推移した。

戦争が始まると相模原海軍工廠指定の工場として海軍の武器関連の部品を収めた。当時の製作はヤスリ・タガネ・ボール盤・旋盤等の機械を使っていたが、職人の腕をプラスした金型如何でその値打ちが決められた。父は懸命に働き、現在の東京荒川区の尾久駅近くに工場を建て、職人も5、6人抱えていた。

庭に埋めた工作機械を掘り起こす

戦争が激しくなると家族は千葉の親戚の家に疎開させられた。東京は米軍の焼夷弾爆撃で焼け野原になった。しかし、父は戦争が激しくなり空襲で機械の一部が消失しないようにミーリング・旋盤・セーパを工場の庭に埋めて難を避けた。

昭和20年8月に戦争が終結した。その12月には千葉県の大網先から木材だけでなく、コメ、野菜等の食べ物を木炭トラックに一杯積み、焼け野原の尾久に家族全員で戻った。たまたま、父の知人がバラック小屋の一部を使わせてくれることになった。

父は持ってきた材料を使い小さな工場の再建に取りかかったが、庭に埋めた機械が掘り出されことにより、戦後の何もない環境からはい出すという離れ業をやったのけた。

松田会長が、東京に引き上げてきたのは、小学6年生。勉強よりも千葉の田舎生活を満喫して、生まれ故郷に戻った時に、中学校への進級が待っていた。

バラック小屋生活では夜の電球は赤糸のようで本が読めない暗さだったため、JR尾久駅の待合



室へ教科書を持って行き勉強をした。父の取引先の社長と専務の二人が開成中学校の出身であることから息子の松田会長に受験することを勧めてくれた。当時の動乱期でも都内の優秀校は受験があり、運よく合格した。

交通事故で父親が大けがをし人生が変わる

しかし、学生生活は長く続かなかった。再建に力を注いでいた父が突然の交通事故にあった。旧制中学3年生になった時に、制度が新生中学に変わり16歳で卒業したが、大学進学をあきらめざるをえず、父の代わりに仕事一筋の生活になった。それでも学業は断ちがたく日本大学工学部へ入学した。仕事重視であったため勉強も休みがちになりながらも通学し、苦学生として25歳で卒業をした。

父は大けがの割には順調に回復し、社業に戻る事になり社長業は継続したが、日常の仕事は業界の会合や近所の会合に出ることだった。しかし、松田会長は会社の総務・工場の設計・製造・お客さんとの折衝等、つまり本来父がやるべき仕事をすべて委譲されたことになった。そのうえ外で働いていた下二人の弟さんが会社に入ってきて兄弟3人で実質的な企業の運営を行うこととなり、戦後の製造業が電気、自動車も元気で新しい製品開発競争の中、金型産業は恵まれた状況で成長を遂げる。

どんどん入る仕事で社業発展

松田会長はどんどん入る電機系の製品開発の金型、自動車産業から来る仕事をすべてまんべんなく受けて行く。

当時の会社の資本金も昭和37年に100万円で「松田金型工業(株)」と法人化し、40年に300万円、45年に600万円、51年には社屋新築、新しいNC工作機械の増設。55年には成形会社を分離する等躍進が続く。お客さんも車両関係、家電関係、OA関係、スポーツ・レジャー用品、農機具関係、ディスプレイ等々プラスチック金型の難しい仕事もこなしていくことなる。まるで金型のデパート業のような多品種の製品にチャレンジする。

同社の応接室には金型の道を歩んできた「製品」サンプルが今でも数多く展示されている。

松田会長は、かつて電気メーカー大手から金型



製造部門の協力を依頼され資材・技術・検査等の数名の課長級の方が来社し、その大手企業の敷地内に工場設置まで呼びかけられた。しかし、“決まった金型専門事業の方が効率も良いが、幅広い産業分野の金型を受注している方がリスク回避になる”と日ごろから強く話していた父の経営方針を守り、地味であれ多種多様の金型造りを継続することのこだわりが、今日の事業の礎となっている。

地下工場付きの6階建てビル建設

更にバブルがはじける前に6階建ての自社ビルも建設した。2階までのオフィスと地下工場、3階以上を住宅部分にした。汚い・きつい・危険という3K職場からの脱皮を考えたビルだと言う。建設後すぐにバブルがはじけ、金型業界は大手ユーザーのグローバル化も加わり、次第に仕事がシュリンクしてきた。その工場も今は稼働を止め、3階以上はマンションになっている。

この本社工場は5階建てで5階に社長家族、4階に会長家族が住み、3階までは工場になっている。長男である現社長の雄一氏に譲ってからは、社業はすべて任せている。社長交代の時に話あったことは「今の世の中が悪いと嘆いてもしょうがない。どんな変化にも素早く、絶えず対応できる会社にしよう」と考えが一致したと話す。

今は安心して社長の会社経営を見ていることができるが、難しい金型のサンプルを見せながら、“これは自動車用のモータ関係の部品で、上手くできれば素晴らしいものになる”と、ご自身は技術開発には余念のない様子である。(I)